

この「声」を待つ人がいる



▲
「健康な体に感謝して、精いっぱいひのきしんに励みたい」と森口さん
（「点字文庫」録音室で）

朗 らかで、耳に心地良く響く声——。布教部福祉課内にある録音室で、『天理時報』などの音訳にいそむ森口典江（55歳・城法大教会教人・天理市）は、およそ30年にわたって、この場所へ通っている。

きっかけは、所属教会で女子青年勤めをしていたとき、父の知人から紹介を受けたことにある。

「引っ込み思案な私にも、できるかもしれない」。福祉課主催の講習を受け、ほどなく『テープ天理時報』の録音ひのきしんに参加。結婚、出産を経て、いまでは録音に加えて校正作業を任されるまでになった。

20年前、最愛の父が65歳で出直した。入院中、眼底出血を起し、両目がほとんど見えなくなった。ベッドの脇でお道の本を読み聞かせる日々を送った。

音訳の原則は、読み手の主観や感情を交えず、書かれたものを忠実に音声化すること。しかし、ただ読めば伝わるというものではない。

「それまで周囲に目の不自由な方がいなかったの、正直言って、音訳は『自分のできるひのきしんの一つ』くらいにしか思っていなかった。それが、父に読み聞かせる中で『どんな音訳をしてほしいのだろう』『どう読めば文意がきちんと伝わるのだろう』と、聞き手の立場を慮るようになった」と振り返る。

それからは、一つひとつの単語の意味や文意を意識して読んだり、テレビのアナウンサーの読み方を気にしたりするようになったという。

「あれこれ考えすぎて、どう読めばいいのか迷うことはしょっちゅう。自分の声を楽しみに待っていてくれる方のことを思い浮かべると、決しておごなりにはできない」もう一つ、気づきを与えてくれた出来事がある。

5年ほど前の秋、遠方で音訳を続けていた女性が末期がんであるという知らせが入った。一度は「辞める」と連絡してきたものの、後日「少し体調が良くなったのでやりたい」と。しばらくして、音訳した全240頁のエッセーを森口に送ってきた。

「呼吸がつからそうなところもあったが、一文一文を大切に発声する彼女の声は、胸に迫るものがあった」。その後、手紙でやりとりをしながら校正作業を進め、無事に録音図書は出来上がった。

年明け、森口は女性に年賀状を送った。女性の夫から「妻は亡くなりました」と返信が届いたのは、3月のことだった。

「自分の声を喜んでくれる人の存在が、彼女の心の糧となって病床生活を支えていたのかな」

と同時に思った。

「目が見えて、耳が聞こえて、肺活量があって……。音訳に携われるのは健康な体をお借りしているからこそ」

「録音テープを待っていてくれる人と、お互いを高め合える仲間が存在が、私にとっての原動力」。付箋がびっしり貼られた本と辞書を手にも、森口は今日もマイクの前に座る。

※天理時報 2013年7月28日号より。記事の内容等は掲載当時のものです。